

論文のオープンアクセス掲載料及びいわゆるハゲタカジャーナルに関する

アンケート並びにインタビュー結果報告書

令和3年11月

東海国立大学機構 図書館 蔵書構築プロジェクトチーム ジャーナル問題サブチーム

## 目次

本調査の概要及び結果（サマリー） .....	3
APC アンケート・インタビュー結果（詳細） .....	6
I. 実施期間 .....	6
II. 回答数・インタビュー実施数.....	6
III. 結果.....	6
1 APCについて .....	6
1.1 APC支払のケース .....	6
1.2 APC支払に関する不満.....	7
1.3 APCの補助 .....	8
1.4 APCの支払経験がない理由.....	8
2 ハゲタカジャーナルについて.....	10
2.1 ハゲタカジャーナル被害について.....	10
2.2 対策について.....	10
3 研究活動・研究評価について.....	11
4 その他 .....	11
アンケート自由記述・インタビュー記録 .....	12
1 APCについて.....	12
1.1 APC支払のケース.....	12
(研究の進展・活性化のため、研究成果はオープンにすべきと考えているから) ....	12
(研究を広く知ってもらえることができるから) .....	12
(投稿先として選んだ雑誌がOA誌だったから) .....	12
(予算があればOAにする) .....	12
(アクセプトされやすいから) .....	13
(査読が早いから) .....	13
(トランスファーによって自動的に) .....	14
(共著者の意向) .....	15
(分野としてOAが主流だから) .....	15
(予算に余裕があったから) .....	15
(その他の理由) .....	15
1.2 APC支払に関する不満 .....	15
(高い) .....	15
(高いことによる弊害) .....	17
(査読・編集体制の不備、不満) .....	18
(価格の不透明性) .....	19

(研究費の支出手続き) .....	19
(その他意見・コメント等) .....	19
1.3 APCの補助.....	20
(賛成) .....	20
(反対) .....	21
(その他意見・コメント等) .....	21
1.4 APCの支払経験がない理由.....	21
(高額で断念) .....	21
(学会費に含まれている) .....	22
(別のOA手段：プレプリントサーバ) .....	22
(別のOA手段：機関リポジトリ) .....	23
(別のOA手段：研究者SNS、個人サイト等) .....	24
(投稿先がOA非対応) .....	24
(OAにしたくない) .....	24
OA・学術出版全般への意見・コメント .....	24
2 ハゲタカジャーナルについて.....	26
2.1 ハゲタカジャーナル被害について.....	26
(トラブル等事例) .....	26
(迷惑メール) .....	26
(見分けが難しい) .....	27
(自衛策) .....	28
(MDPI) .....	29
(その他意見・コメント等) .....	30
2.2 対策について.....	31
(リスト・指針が欲しい) .....	31
(教育・サポートが欲しい) .....	32
3 研究活動・研究評価について.....	33
(研究評価：投稿論文の重要性) .....	33
(研究評価：評価基準の再検討) .....	33
4 その他.....	34
(ジャーナル購読費の問題への対応) .....	34
(Read and Publish 契約について) .....	36
(国レベルでの議論を期待) .....	36
(研究者支援を要望) .....	36
(その他意見・コメント等) .....	37
〈参考〉アンケート項目.....	38

## 本調査の概要及び結果（サマリー）

本調査は、論文のオープンアクセス掲載料（APC）の支払いやハゲタカジャーナル等のトラブルについて、研究者がどのような問題を抱え、それに対しどのような意見を持っているかを明らかにし、研究環境の改善及び学術情報流通における課題解決の参考にすることを目的として、名古屋大学附属図書館が主体となって研究協力部研究企画課と連携し、研究担当副総長、図書館担当副総長の連名により名古屋大学内に協力を依頼し実施したものである。

### 1. 実施期間

令和3年7月14日（水）～令和3年8月31日（火）

### 2. 対象者

本学の教員・大学院学生（特に論文を査読誌に投稿した経験がある方）

### 3. 調査方法

Webアンケートフォーム及びオンラインミーティング

### 4. 回答数

アンケート：346件 インタビュー：17名

### 5. アンケート及びインタビュー結果（サマリー）

アンケート回答者の属性について、研究分野は、自然科学系（34%）、医学系（30%）、工学系（26%）、社会科学系（5%）、人文系（5%）であった。また、身分は、教授・准教授（53%）、講師・助教（28%）、大学院生（14%）、その他（5%）であった。

アンケートでは、まずAPCの支払経験有無を問い、支払経験のある人にはAPCを支払ってオープンアクセスにした理由と価格やサービスへの意見を、支払経験のない人にはその理由を尋ねた。また、全員に対しハゲタカジャーナル等のトラブル経験有無を調査した。

APC支払経験がある回答者は全体の58%で、分野別では自然科学系が最も多く（68%）、人文社会系は10～20%にとどまった。オープンアクセスにした理由は「研究を広く知ってもらえることができるから」（112件）、「研究の進展・活性化のため、研究成果はオープンにすべきと考えているから」（96件）が多かった。APCの価格やサービスについては、不満が「ある」が「ない」を上回り（59%；41%）、その内容としては「高額である」（106件）が大多数を占めた。一方、APC支払経験がない回答者は全体の42%で、その理由は「研究費節約のため」（70件）が多かった。また、論文をOAにするための別の手段としては、機関リポジトリやプレプリントサーバーが利用されていた。

いわゆるハゲタカジャーナルに関わるトラブル経験については、「ある」との回答は

全体の6%にとどまった。トラブルの内容は「ハゲタカジャーナルと知らずに投稿してしまった」「査読が返ってこなかった」等があった。

アンケートの中でインタビューへの協力者を募り、17名にオンラインで各30分のインタビューを実施し、アンケート回答に基づいてより詳細な聞き取り調査を行った。

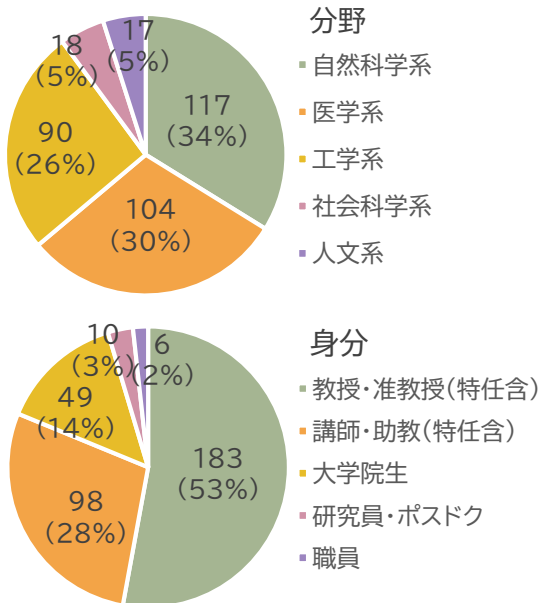
インタビューでは、OAを推進するためAPCを積極的に支払うというよりは、状況によりやむをえず支払うということが多々あることが明らかになった。一方、OA誌は査読が早い、比較的アクセプトされやすいことを生かしている経験談も聞かれた。また、分野によっても状況がかなり異なるため、一律ではなく個別の支援を求める声が多く、その補助は大学というよりも助成機関や国に求めるという強い意見も聞かれた。さらに、OAの手段はプレプリントサーバー等APCを必要としない代替手段もあること等から、学術雑誌の購読契約をAPC込みの契約へ切り替えるか否かについては、否定的な意見が多かった。ハゲタカジャーナルについて、大学として情報共有や注意喚起を行い、方針を定めてほしいという要望もあった。

以上を通じて、論点は、商業出版社の利益追求、世界的な論文数増加、研究評価指標等に及び、学術雑誌論文を中心とした学術コミュニケーションの在り方について、抜本的な解決が望まれることが改めて分かった。

# 論文のオープンアクセス掲載料及びいわゆるハゲタカジャーナルに関するアンケートおよびインタビュー結果（概要）

【趣旨】論文のオープンアクセス掲載料APCの支払いやハゲタカジャーナル等のトラブルについて、令和3年7月14日～8月31日にかけて、本学教員・大学院学生（特に論文を査読誌に投稿した経験がある方）に対し、アンケート及びインタビューを行い、主な意見を取りまとめた。

## 回答者属性

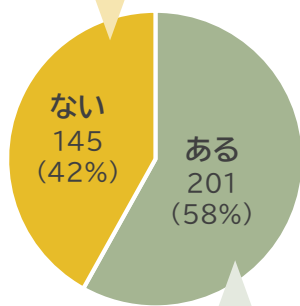


## APC支払経験

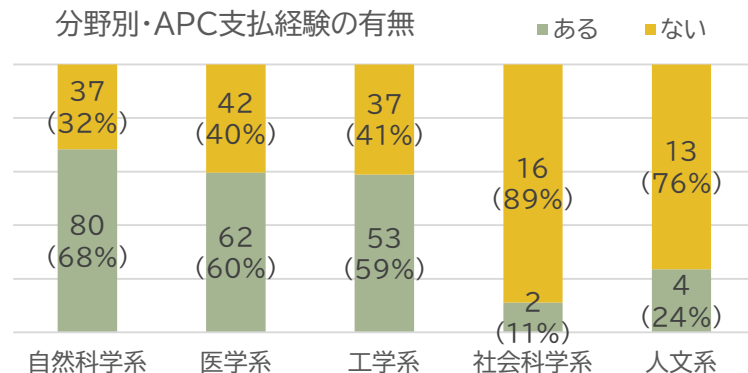
### APCの支払経験がない理由

APCの支払が困難とまではいえないが研究費節約	70
APCの価格が高額で支払が困難	36
投稿先がOA非対応	32
別の手段でOAにしている	28
そもそもOAにしたくない	12
APCが不要	9
その他	2

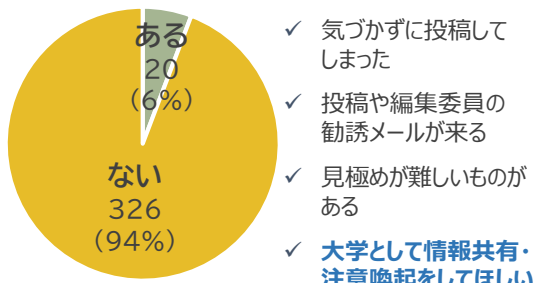
- ✓ 医学系、工学系、自然科学系はAPC価格が主な理由、社会科学系、人文科学系は「別の手段でOAにしている」「投稿先がOA非対応」が主な理由  
→分野によるOA普及度の差異がかなりある可能性
- ✓ 機関リポジトリ、プレプリントサーバー等無料で利用できる手段を利用してOAに



### 分野別・APC支払経験の有無



## ハゲタカジャーナルに関わるトラブル経験



## APC支払のケース

1. **出版社の論文投稿システム**によるもの  
OA誌へのトランスファーシステムが商業出版社の収入源に、背景に世界的な論文数増加
2. 論文を**早く公開したい場合**  
査読等が早く、手続き期間が短い
3. 共著者の意向 等

APCを支払って出版社版をOAにするGold OAは研究費が潤沢な場合に限られる

## APCの補助

- ✓ APC支払は研究費を圧迫する支援を希望
- ✓ 研究費助成機関等、大学以外の機関からの補助を希望
- ✓ 分野により状況が異なるため個別の支援の検討が必要

✓ APC補助よりも博士課程学生の経済支援や購読誌の整備を希望する声も

## APCに関する不満

- ✓ 高額である  
約10万円～50万円以上
- ✓ 査読・編集体制の不備
- ✓ 価格の不透明性
- ✓ 研究費の支出手続き

## 研究評価の問題

- ✓ 論文数や引用数といった指標を用いることが問題の背景にある

## APC アンケート・インタビュー結果（詳細）

### I. 実施期間

令和3年7月14日（水）～8月31日（火）

### II. 回答数・インタビュー実施数

アンケート回答 346 件、インタビュー実施数 17 名

### III. 結果

#### 1 APC について

APC の支払経験について尋ねたところ、支払経験があるとの回答は全体の 58%であった（図1）。分野別に見ると自然科学系が最も多く（68%）、次いで医学系（60%）、工学系（59%）であった。一方で人文社会科学系は 10～20%程度にとどまった（図2）。

図1 APC支払経験の有無

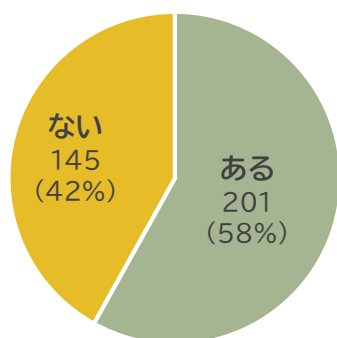
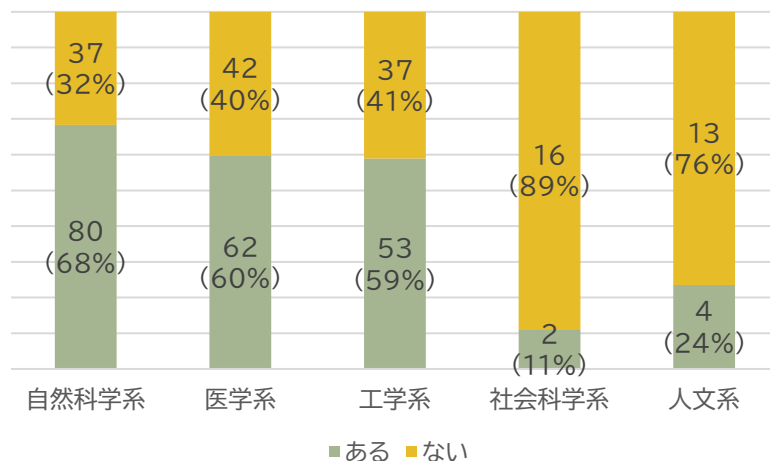


図2 分野別・APC支払経験の有無



#### 1.1 APC 支払のケース

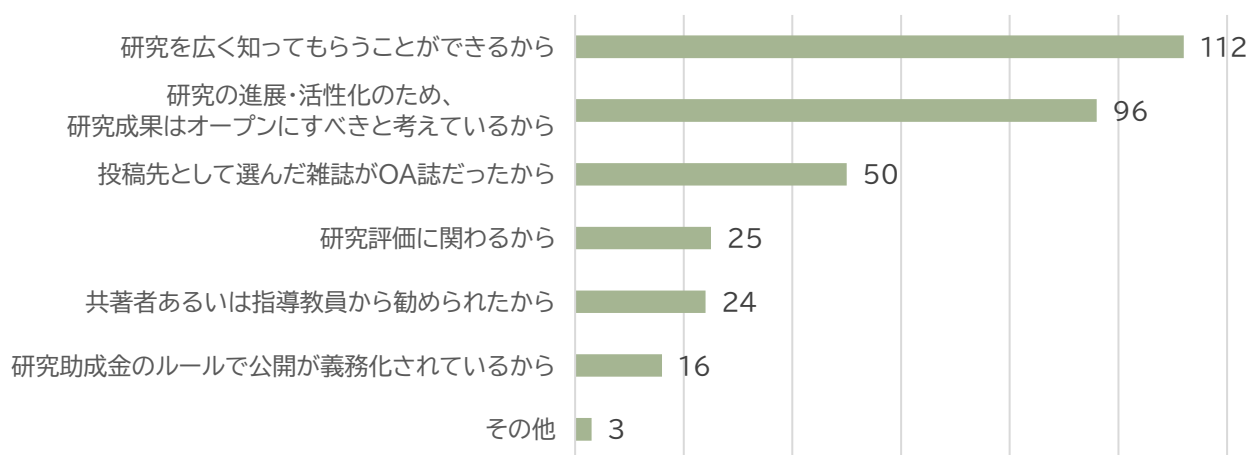
APC を支払ってオープンアクセス（以下 OA）にした論文についてその理由を尋ねたところ、「研究の進展・活性化のため、研究成果はオープンにすべきと考えているから」「研究を広く知ってもらうことができるから」「投稿先として選んだ雑誌が OA 誌だったから」との回答が多く見られた（図3）。「OA 論文は多くの人に読まれ、引用も増える傾向がある」などの意見もあり、OA のメリットが研究者に広く浸透し、OA 誌が台頭しつつある状況が窺われた。ただし、APC を支払うケースとしては（1）OA 誌に投稿する場合と（2）購読誌に投稿するが APC を支払って選択的に OA にする場合とが考えられるが、インタビューでは両者を厳密に区別して尋ねたところ、多くは（1）で、（2）が選択されることは少なく、（2）は何らかの事情で予算に余裕が生じた場合などであることが分かった。

また、OA 誌のメリットとして「購読誌と比べてアクセプトされやすい」「査読や処理スピードが速く出版までの期間が短い」などの意見があった。例えば博士課程学生の学位審査に関わる論文の場合など、投稿から掲載までの期間が長いと審査や手続きに間に合わず卒業できないといった事態も起こりうるため、APC を支払って手続き期間の短い OA 誌を選択するという事例が挙げられた。

さらに、投稿論文が希望する雑誌にアクセプトされなかった場合に次の投稿先として OA 誌を提案され（トランスファーシステム）、それによって結果として APC を支払うことになったという回答も多くあった。APC が必要になるというデメリットはあるが、別の雑誌に出し直す手間と時間を考慮し、提案通り APC を負担して投稿することが選択される傾向にあるといえる。大手の OA ジャーナルでは年間 2 万本以上の論文が掲載されており、APC は 1 本 20 万円程度であるため、出版社の大きな収入源になっている可能性があることや、こういったシステムが導入された背景には世界的な（特に中国からの）論文数増加があることも指摘されている。

その他、「共著者や学会の意向で」、「OA が主流になりつつある研究分野だから」、「予算に余裕があったから」というケースもあった。国際共著で共著者の所属機関が OA 一括契約を結んでおり、自分自身は負担することなく共著者が APC を全額負担してくれたという例もみられた。

図3 APCを支払ってOAにした理由



## 1.2 APC 支払に関する不満

APC 支払に関する不満が「ある」との回答は 59% で、不満内容のほとんどは「高額」であることであった。大型の補助金などが付いて予算が潤沢な場合は支払可能だが、そうでなければ支払自体が困難であるという意見がアンケート・インタビューともに多数を占めた。インタビューでは実際に APC として支払った金額について尋ねたところ、10 万円～20 万円が最も多かったが、中には 60 万円以上かかっ



たという声もあった。ジャーナルのレビューや編集委員を引き受けることによって APC が無料または割引価格になる制度を利用する研究者もみられた。

APC が高額であることの弊害として、支払を断念し投稿先を変えるという選択肢を取ることもあるとの意見があった。学位審査の要件のため論文の投稿をする必要があるが、APC が高額であることが負担になっている、インパクトファクターが高い雑誌は APC も高額となり、予算が潤沢でないと載せられない状況となっているなど、切実な声が複数あった。その他、査読・編集体制や価格の不透明性への不満もあった。

### 1.3 APC の補助

以下の通り、APC 補助を求める意見があった：

- ・ 若手にとって APC の支払いは研究費を圧迫する。指定の雑誌なら何回まで支援、若手枠等の支援があると嬉しい。
- ・ 一部のインパクトの高いジャーナルへの投稿については APC を補助してほしい。安心して投稿できるようになる。
- ・ APC を払えなければ学位審査に支障が出ることが予想されるため、学生に限らず、支援をしてほしい。

一方、以下のような理由で、APC 補助に否定的な意見もあった：

- ・ 研究費がその分減るのは受け入れられない
- ・ 研究助成機関が OA 予算を加えて助成する等、大学以外の機関からの補助を希望する
- ・ APC 補助に回す予算があるなら、諸外国の複数年度にわたるフェローシップ制度のような、博士課程学生の経済支援を行ってほしい
- ・ プレプリントサーバーなど他の方法で OA が実現していることから、出版社の OA オプションはあくまで予算が余っている時のプラスアルファの選択肢であり、そこに予算をつぎ込む必要はない
- ・ 出版社にすでにかんりのジャーナル購読費を大学が支払っていて、その上さらに APC を支払うのは出版社の二重取りとも言え、費用対効果を考えると OA 推進には疑問が残る。APC に予算をかけるならその分読めるジャーナルを増やしたり、最新のジャーナルにアクセスできる環境を整えたりするほうが良い。

### 1.4 APC の支払経験がない理由

APC の支払経験がないと回答した人に対しその理由を尋ねたところ、「APC の支払が困難とまではいえないが研究費節約」が最も多く、APC が決して安価ではないことが分かった (図 4)。分野別に見ると、医学系、工学系、自然科学系は APC

価格が理由であることが多いのに対し、社会科学系、人文科学系は「別の手段で OA にしている」「投稿先が OA 非対応」といった回答が多く、分野として APC の支払による OA が主流になっているわけではないことが示唆された（図 5）。またインタビューにおいて、医学系、工学系、自然科学系の中にも OA が主流とは言えない分野があることが明らかになった。

オープンアクセスにするための別の手段としては、機関リポジトリ(14 件)、プレプリントサーバー (9 件)、個人 Web サイト (4 件) といった回答があった。インタビューにおいても、プレプリントサーバー、機関リポジトリや研究者コミュニティサイトなど、出版社版以外にも様々な手段があり、出版社版を OA にしなく

図4 APCの支払経験がない理由

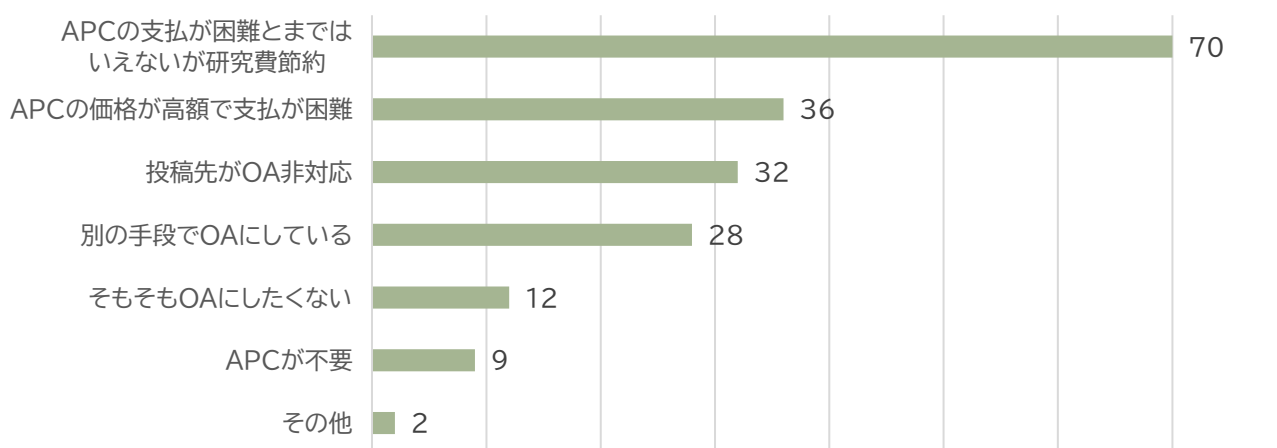
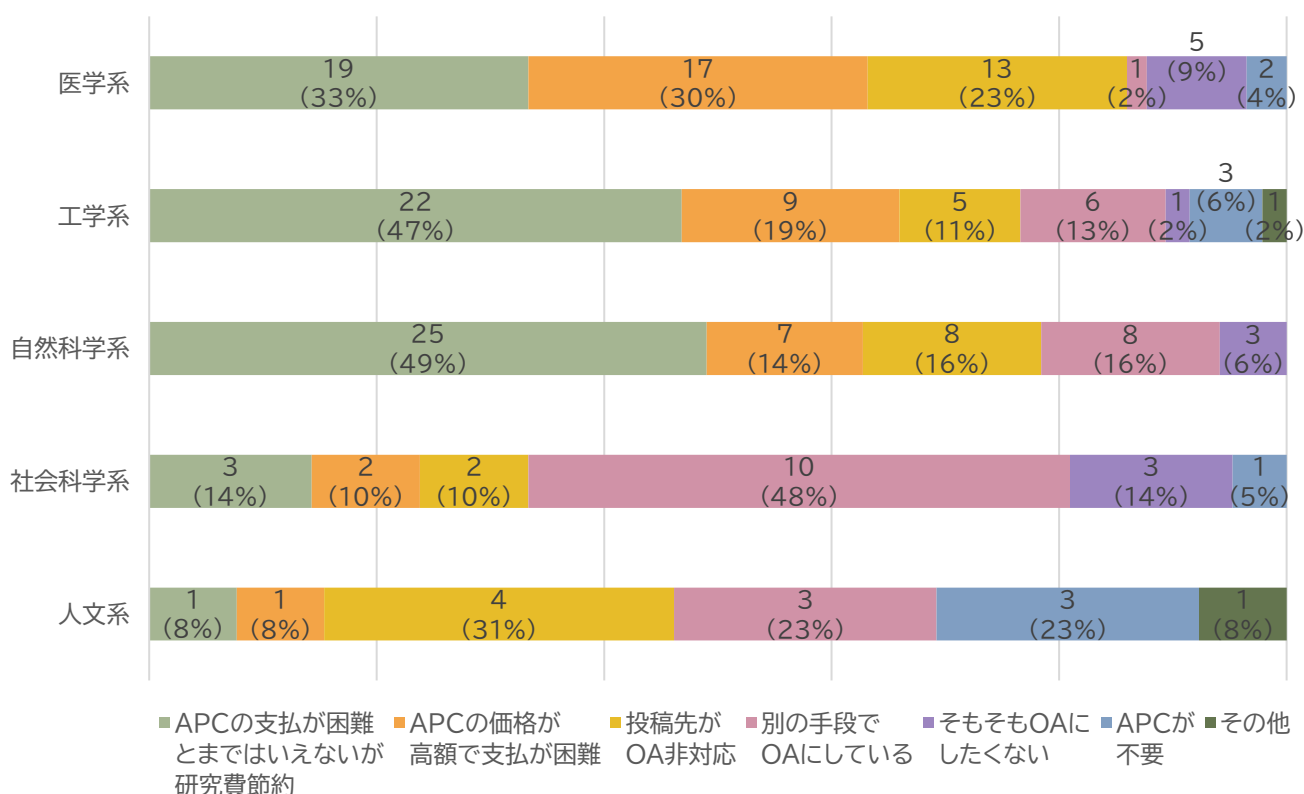


図5 分野別・APCの支払経験がない理由



ても、他の代替手段で OA を実現することは可能という声が多かった。

## 2 ハゲタカジャーナルについて

### 2.1 ハゲタカジャーナル被害について

実際に被害にあったという声は少なかったが、投稿や編集委員の勧誘メールに関してはほぼすべての方が受け取っていた。また、現状では回避できているものの、新しい分野の雑誌に投稿するときや学生等へ助言する際などに見極めが難しく不安であるという声も多かった。

MDPI (スイスに本社を置くオープンアクセス出版社) はしっかりした雑誌とそうでないものが混入していて評価が分かれた。査読も編集も高いレベルでなされているジャーナルがある一方で、エディター勧誘などの悪いイメージを払拭できていないところもある。インタビュー回答の範囲内では、査読等はしっかりとなされており、ハゲタカジャーナルではないという見解が多い。MDPI の中でも個々のジャーナルレベルで判断する必要があるとの声があった。

### 2.2 対策について

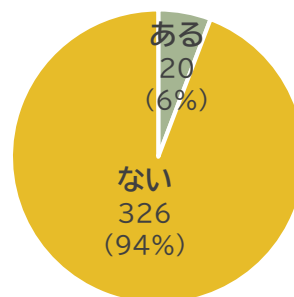
研究の場で実際に行っている対策として、次のようなことが挙げられた。

- ・ 経験の少ない大学院生等が心配なので、投稿する論文を見る段階で投稿先も確認するなど監督・助言している。
- ・ 投稿先は文献データベースなどで確認し、インパクトファクターの付いている雑誌を選択するようにしている。
- ・ メール宛名が間違っている等の不審な点があれば疑う。
- ・ 投稿を求めるメールのほか、レビューを求めるものも多い。いったん引き受けてしまうとレビュアーリストにのるので警戒している。

また、新規 OA 誌の数が増加していること、過去ハゲタカジャーナルと認識されていたが評価が変わってきているジャーナルも存在することなどの理由から、ハゲタカジャーナルであるかどうかの判断が難しい・判断の作業に時間がかかるとの意見も多く聞かれ、現場での対策に加え、大学としての対応を希望する声もあった。

- ・ ハゲタカジャーナルを業績リストに含めてしまった場合、どのくらいネガティブなインパクトがあるのか。大学としての指針をはっきり示すべきだと思う。

図6 ハゲタカジャーナルに関わるトラブル経験



- ・ 自分の分野の定評ある雑誌かどうかの判断はできるが、定評ある雑誌以外の見分けが付きにくいので、信頼できる情報（安全なホワイトリスト等）を出してほしい。
- ・ 見極め方や注意点を教えてほしい。相談窓口の設置や、院生向けの講義の実施なども有効ではないか。

### 3 研究活動・研究評価について

1～2の話題と関連して、研究活動や研究評価についても意見があった。

研究評価においては学術誌掲載論文が重視され、論文数や引用数といった指標が使われており、大手ジャーナルへの投稿が高評価となっている。このことが大手出版社の寡占化につながり、一連の問題が起きていると捉える声が多かった。一方で、OA誌やプレプリントサーバーの台頭、査読フリーでの論文公開の動きなどにより大手ジャーナルの地位も変化しつつあり、大手ジャーナルに対する評価を見直す時期ではないかという意見もあった。また、論文数に偏重した評価基準を取ることにより、ハゲタカジャーナルを敢えて利用する研究者（高額な掲載料を支払えば実質的に査読なしでレベルの低い論文を査読論文として公刊できる）も出てくるのではないかという懸念も示された。

その他、新たな論文の評価指標として、従来の引用数だけでなく、SNSによる「いいね」の数などが利用される動き（オルトメトリクス）があること、オンライン教材・動画などでの情報発信を評価することなど、評価方法の多様化についても触れられた。

### 4 その他

図書館への要望として、ジャーナル購読費の問題への対応、OAの方法やグッド・プラクティスの紹介、ジャーナル投稿に関するトピックやソフトの使い方等、研究者支援も行ってほしいといった意見があった。

## アンケート自由記述・インタビュー記録

### 1 APCについて

#### 1.1 APC支払のケース

(研究の進展・活性化のため、研究成果はオープンにすべきと考えているから)

- 基本的には、論文はオープンアクセスにする方がいいと考えています。費用はかかりますがレビューされやすくなり、社会的に正の影響が出ますので。
- 学術の成果は人類の共有財産なので、APCによるオープンアクセス化を推進すべき。
- 科研費による研究成果について、OAにすることは義務ではなく努力義務だが、なるべく公開しないとイケないと考えている。

(研究を広く知ってもらえることができるから)

- 社会啓蒙的な側面もあり、投稿先として「オープンアクセス」の観点は大きい。購読者数が減っているところより、新興のOAでよく読まれているジャーナルに投稿したい。
- OAにした方が、引用されやすいというメリットはある。
- OAにした方が引用が増えるということは感じている。
- 引用効果（OAにしたから引用が増えたかどうか）は分からない。
- そもそも同業者が大学で購読している雑誌に投稿している。引退した研究者や民間の人向けにOAにするメリットはあるかもしれないが潜在的な読者数が分からない。

(投稿先として選んだ雑誌がOA誌だったから)

- 雑誌の特集号で、自分の研究テーマに合ったものだったので投稿したら、たまたまOA誌だったのでAPCを支払った。審査が早かった記憶がある。

(予算があればOAにする)

- APCを払ってOAオプションを選択した理由は、自分の研究を広く知ってもらえることができ、引用数の増加につながるためだが、1本約2,000ドルと高額であり、予算が潤沢な場合に限られる。
- 研究費がなければ払えないが、払える状況ならOAにする。
- OAにできるならしたいと考えているが、OAかどうかで投稿先を選ぶわけではない。
- 適正な価格であればオープンアクセスは問題ないと考えている。
- APCが高くなければOAにしたいとは思いうし、研究費が余っていたらOAにするつもりである。ただ、名大でのAPC支払の手続きについて、立替では受け付けてもらえない額だと思うがではインボイスはどうやって取るのかなど、手続きについて定かでない。
- 普段投稿する雑誌はOAにするかしないか選択できることが多い。現状では、自身の

論文投稿の際に OA を選択しないことの方が多い。その理由は、ひとつには APC が高額であるため、またオープンにする手段が他にもあるため。研究者としては学術誌に投稿することが最優先で、OA オプションを付けるかどうかはその次の選択肢になる。OA そのものは、引用数を増やし研究成果を広められるといったメリットがあるし、価値あるものだと思う。出版社版が OA にできることが理想だが高額である。コストに見合ったインセンティブがあれば選択したい。

- 出版社の OA オプションはあくまで予算が余っている時のプラスアルファの選択肢である。arXiv など他の方法でも OA にすることは可能であるし、論文の内容が良ければ読んでもらえるので、そこに予算をつぎ込む必要はない。

(アクセプトされやすいから)

- 購読型のメジャー誌では、エディトリアルリジェクトと言って、論文を読む前に「ジャーナルの目的に合っていない」といきなりリジェクトされることがある。内容に自信があったのだが、学術的な価値より面白いかどうかで判断されるフシがある。いっぽう OA 誌では、内容的にまずい場合はリジェクトされるが、門前払いがない。
- 自分の研究は日本国内に関わるものなので、外国雑誌に投稿しても、背景の違いからか、購読型ジャーナルでは掲載に至らないことが多い。それもあって、もう少し間口の広い OA 誌への投稿を考えることが多い。
- Nature 関連誌でも金儲けのためにオープンアクセスジャーナルを出版している (Scientific Reports)。インパクトファクターが高いわりにアクセプトされやすいので投稿することがある。
- アソシエイトエディターが内容を確認した後、順に査読に回るが、OA 誌では査読が甘い印象がある。アクセプト割合も高いので、研究のインパクトや新規性という点では甘く評価しているのではないか。
- そもそも OA ジャーナルと購読型論文とは査読のポリシーが異なる。OA ジャーナルは実験結果等が正しければ OK で、新規性は問わないものもあるようで、これが掲載される？他の雑誌なら追試が求められそうなものだけ？というものもある。
- 信頼できる雑誌は投稿される論文数が膨大になってきているため、載るのが難しいという問題はある。

(査読が早いから)

- OA ジャーナルは査読が早いので大学院生が学位取得時に使いたい場合は出す。たいてい研究室の教授が APC を出しており、15万円くらいであれば何とかなる。
- OA 誌の査読期間は短く、ファーストリアクションまで1か月程度であるのに対し、従来の購読型の場合は2~5か月かかる。研究室で年間約15本論文を出すので、期間が長いと管理も大変になる。とくに博士課程の学生の場合、早く審査してもらわないと困る。

- OA 誌は査読が早いというメリットもある。MDPI や Frontiers は知名度があるし、ボリュームのエディターが界限で著名な研究者だったり、他の研究者の投稿や評判を聞いたりして投稿を決めている。
- 学生の場合は、教員とは状況が異なっている。卒業時期や奨学生の在学期間といったタイムリミットがあるため、投稿から掲載までの期間が長いと間に合わず卒業できないといった事態も起こりうる。そのために APC を支払って手続き期間の短い OA 誌を選択することもある。
- 査読は早いところで 1~2 週間、長いと 1 か月かかる。早いところは編集者をたくさん抱えているトップジャーナルか OA 誌であるため、学生であれば OA 誌を選択することが多くなる。中間レベルの雑誌は時間がかかる。
- 査読は丁寧で、2、3 度やりとりできた。要した時間は全体で半年ほどだった。
- 査読者として参加することもあるが、扱う論文の質も様々で、編集方針も細かいところにはこだわらないといった印象がある。
- Web サイトに「査読が早い」と書いてあっても本当に早いかどうかはわからないので、投稿したことがないと信用できない
- 例えば Scientific Reports は査読者がほとんどケチをつけず、年間 2 万本以上の論文が掲載されている。しかし APC は 1 本 20 万円以上かかるため、出版社の大きな収入源になっているのではないかとみている。評判も落ちてきているように思う。Nature 以外にも ACS の Pros One や IOP でも同様の制度はある。
- 出版社はそれ(APC を支払う)でいいが、査読はボランティアであり、多少の謝礼があってもよい。
- (査読について) 全般的に遅くなってきている。投稿数の激増(主に中国から)が背景にある。遅れるあまり定期刊行ができないこともある。エディターリジェクトされることもある(あまり納得できない)。

(トランスファーによって自動的に)

- APC の支払をしたことはあるが、OA にしようと思って能動的に支払ったわけではない。投稿論文がこちらの希望する雑誌に採用されなかった場合に、トランスファーシステムによって別の雑誌の査読へ回る仕組みを取っている出版社がある。このときに、OA 誌に査読が回り、結果として APC を払った。
- Elsevier, ACS, Springer, MDPI 等の OA 誌に投稿し、APC を支払うことがある。大手出版社では、目的の購読型ジャーナルに非掲載となっても、半ば自動的に OA 誌に転送されるシステムがある。そうすると APC はかかるが、別の雑誌に出し直すのはフォーマット修正等の手間が相当大変なので、時間等を考えると高いと言っていられない。OA 誌は査読が早く、自分の場合はインパクトファクターが 4~5 の高い雑誌に掲載でき、引用回数も伸びて良かった。
- Nature Communications という OA 誌があるが、却下されると自動的に別の雑誌の投

稿画面に移行する・APC も安くしておくよ。放っておくと投稿のお誘いメールもくるらしい。レフリーレポートも引き継ぐから、と。そうして行き着くのがおそらく Scientific reports。新規雑誌なのがいい論文が載っていると思ったらそういう仕組みらしい。

(共著者の意向)

- 共著者の意向で APC を払ってオープンにしたことが一度だけある。その際、APC は共著者全員で分担して負担した。(2015 年頃の話)
- 筆頭著者がオランダの研究者であり、その筆頭著者の所属機関(というより国?)が OA 一括契約を結んでいたため OA になった。(ヨーロッパ圏の助成金による研究成果は OA 義務がある場合あり。研究費とは別に OA のために助成金を出してくれるシステムがある。ただし制度は国によってまちまちで、先述の通りオランダは国で OA 契約しているがベルギーはない。共著者がオランダ→ベルギーに異動した際に困った)
- 共同研究で共著者が APC を支払ってくれる場合もある。

(分野として OA が主流だから)

- OA 雑誌については、APC を払うことが前提(最初に、OA にするお金があるか聞いてくる)。OA にしない選択もあるが、分野の流れとして OA が主流なので、高いと思いつつも APC を払う。
- (OA の) こういった動きに乗らないと出遅れてしまう危機感がある。追随せざるを得ない。
- 学生の出す論文も基本的に OA。教員が費用を負担。

(予算に余裕があったから)

- 日本の学会の欧文誌でオープンアクセス (OA) をチョイスした。USD2,950 だった。ちょうど科研費が 30~40 万円余り延長も可能だったため科研費で支払えた。この予算がなければ、高額で OA にはできなかった。
- コロナ禍以前は年に 4~5 回学会参加で海外出張へ行っていたが、学会発表がすべてオンラインになったので、旅費が浮いて APC に回せるようになった。

(その他の理由)

- 新創刊の OA 誌が初年度のみ APC 無料のキャンペーンを行っていたので利用した。

## 1.2 APC 支払に関する不満

(高い)

- APC の支払は、1 件 10 数万円で年間 100 万円程度はかかっている。今は大きなプロジェクト予算があり支払いに困らないが、将来は心配。



- APC はこれまでに 2 度支払ったことがあり、1 回目は 10 万円弱、2 回目は 20 万円弱であった。支払える範囲ではあるが高額であり、20 万円が限度だと感じる。
- エディターズチョイスで OA 無料の場合もあるが高額だと感じている。価格は掲載前にならなければわからない。
- OA 誌は MDPI や Frontiers に出したりする。額は規定額で把握していない。出版社には OA にする分何かしら支払わないといけないと思っている。現在研究費に困っていないので、30 万円以上となると困るが、10 万~15 万円くらいなら問題ない。
- 投稿したことがある雑誌はページチャージが 2 千円、超過ページチャージが 2 万円！で 8 ページで 1.6 万円、9 ページで 3.6 万円である。これから考えると 10 万だったら考える、5 万円だったらみんな出すだろう、くらいではないか。
- 30 万円はとにかく高い。どれだけ試薬が買えるか！
- APC の額は通常 2~30 万円ほど、高い時で 65~66 万円（カラー図表、構造解析のデータがあったからか）
- オープンアクセスの代償として APC を払わないといけないのはキツイ。
- APC あるいは購読費を徴収しないと journal の運営が難しいのは重々承知ですが、あまりにも現在の APC は高すぎます。
- 5 回くらい払ったことがあり、それぞれ 20 万円くらい。20 万円ならぎりぎり出せるかな？くらい。もっといいジャーナルだと 50 万以上かかってくるが、高い
- 費用が高い。平均して 30 万円以上。
- transfer 先が高額の APC を請求される雑誌になってしまうこともあり、少なくとも価格が現在の半分以下に設定されることが望ましいと考える。
- 編集委員として協力すると年 1 回 APC が無料になる、査読を早く返すと割引になるといった制度があり、それを活用して APC を抑える努力もしている。
- ジャーナルのレビューを行うとクーポンがもらえて、次に投稿する時に APC 割引が受けられることがある。
- 高すぎる。たとえば Nature Materials は四十万円近く払った。
- 高額(30 万円程度)
- 高額 (3000 ドル程度)
- 価格が 20 万円以上だったと記憶しているが、もっと低価格を希望します。
- 先日、日本円にして 38 万円かかりました。
- かなり高額である。(50 万円以上のケースがある)
- 高額 (15 万円弱) である。
- 掲載料と open access fee を足し合わせると論文 1 本で 50 万円と高額。
- APC が高額すぎる。30 万円から 40 万円程度かかるのが通常であり、研究費がなければ支払えない。また研究費があってもそのほとんどが APC に費やされる印象がある。
- 自分が実際に支払った PLOS ONE については比較的少額だが（本来の投稿料と比べて

すごく高いわけではない。そもそも article processing charge という名称になっているかも正確には知らない)、将来的に投稿する可能性がある雑誌については 50 万円以上の APC を要するところもあると聞いている。「ない」を選択することによって間違ったメッセージを発することになることを危惧して、あえて「ある」を選択した。

- Nature Communications は高額過ぎる
- Nature communications などは料金が高すぎると思う。基盤 C クラスだと年間の研究費が APC だけでなくるので。逆に言うと研究費 (or 出版助成用の予算) が少ないともいえる。
- おおむね妥当な料金だと思うが、Nature 系列の雑誌(Nature Communications など)は不当に高い。
- 一部のハイレベル雑誌の料金が高すぎる。
- これまでの APC では不満はないが、投稿先として検討した雑誌によっては費用が高いと感じるものがある。
- 価格が高く、研究費から支払うことは研究者にとって負担。
- 価格が高すぎる。十分な研究費がなければ出版ができない。
- 高い。特に若手向け予算の範囲では比較的安価な OA 雑誌であっても負担が大きい。
- 高い。科研費がなければ運営費交付金では支払うことができない
- 少し高かった。学内で聞く価格ほどではなかったが。
- やはり、高額である。予算がない場合は、支出が大変である。
- 高額である。研究費をとっていなければ、支払うことができない料金である。
- 高額である。個人の競争的資金に依存し、できたとしても研究機関ごとの Read and Publish がせいぜいと思われる状況であること。
- APC の価格が高価である。科研費などの資金が比較的潤沢にあるときには APC を支払うことができるが、そうでないときには支払うことが困難であること。
- 割引やファンドが少ない
- オープンでない print までの時間が大きく違うことでオープンを勧誘している。値段が高い。
- オープンアクセス化に関して、こちらに選択権がなく高額な場合は、やはり次回からのその雑誌社への投稿を躊躇します。

(高いことによる弊害)

- 結局は我々が自費で APC を支払っていることもしばしばある。
- 医局により自費負担を求められることがある。
- 同じ出版社の雑誌でも、IF が高い雑誌は APC も高額になる。予算が潤沢でないと、高 IF の雑誌に載せられないというヒエラルキーのようなものがある。時間と業績をお金で買っているという自覚はある。
- 国内学会誌の OA 化について議論中であるが、OA 化の費用を出せる人とそうでない人

との間で研究の格差が開くことになるのではという懸念がある。

- オープンアクセス自体は科学界にとって良い試みと思われるが、APC によって新たな問題が生じているように思う。すなわち資金があるところに出版や引用が集中するという選択がおき、資金のない研究者や若手研究者による参入を困難にしている。また研究者が外部資金の獲得に多くの時間を費やすことになる。
- PLoS ONE への投稿で約 18 万円支払った。APC 支払い経験はこの 1 回のみ。自分は研究費（科研費）があったのでまだいいが、正直高い。PLoS ONE に出した理由は、IF がつく程度のランクの雑誌への掲載が学位論文審査の要件になっていたから。社会人学生でない学生、研究費のない学生にとっては APC の支払は苦しいだろう。投稿料のかからない学会誌への投稿を積み重ねてなんとかしているか、OA 誌でない従来の購読誌に出しているか、指導教員と折半で APC を支払ったという話も聞いた。
- 高いことによる弊害 学位を取るために投稿が必要ですが、投稿分野の多くの雑誌がオープンアクセスしか選ぶことができません。オープンアクセスでない雑誌を探すことの方が難しいです。そのため APC が必須であり、額が 30 万近いものもあるため、論文投稿することを躊躇います。学位をとるために高額のお金を払うことが必須なのは、常識なのかもしれませんが、何のための学位なのかわからなくなります。
- 私の場合、APC が安かった時期に投稿したか、共同研究者が支払ってくれたケースしかありません。APC が目に見えて高騰化してからは、高額と思えるオープンアクセス誌には投稿していません。それはあまりよい傾向ではないと思っています。研究者の負担にならない形で、国際的に信用できる研究情報保管・交換システムが作られてほしいと思っています。そういうものこそ、研究のインフラ整備と言えらると思います。
- APC を支払って OA にするか、特にしないか選べるような場合（Gold OA 雑誌への投稿）には、予算事情から、積極的に OA を選択することはない。額も大きいので、本当にお金がなければ投稿をやめるという選択肢を取ることもある。
- 高額であったため、オンライン化を取りやめた。
- 高額なものもあり、年度末など予算残額が厳しい状況ではオープンアクセスを断念せざるを得ないことがある。

（査読・編集体制の不備、不満）

- 価格に見合ったサービスや効果が実感できないこと。
- ジャーナルに投稿した時は出版社は A 社で APC は 20 万円程度だったが、アクセプトされた後に出版社が B 社に変更になり、APC が 30 万円になった。B 社のプロダクションのプロセスでは、初稿の時からタイプミスが異常に多く、修正を伝えても、一回で正確に修正できていることがないばかりか、別のところで不要な修正を勝手に加えたりで、タイプセッター、コピーエディターの仕事の質が酷すぎて、大手出版社としてありえないと思った。私が校正したのは PDF 版で、PDF 版のミスは気づいたところは全て修正したが、PDF から読み取ったというオンライン版には、細かい点で数カ所ミス

が生じている。2ヶ月以上前に修正を依頼したが、まだ修正されておらず、もう諦めた。オンライン版の出版に際しては、Green OA か Gold OA かの意思確認の連絡がなく、Green OA の Agreement しか送ってこなかったの、先に Green OA で publish されて、その後、何度もお願いのメールを送ってやっと Gold OA にしてもらった。しかし、APC 支払い後も、数週間の間、オープンアクセスにならず、問い合わせのメールをしても返事がなかった。このような仕事の質でこの金額はあり得ないと思う。ジャーナル自体は自分の分野の一流誌で査読プロセスにも満足しているけれど、出版社に問題がありすぎると思った。今後は、ジャーナルを選ぶ際には出版元がどこかも考慮する必要があったと思うが、私が投稿したいジャーナルの多くが B 社なので困っている。

- 全てのオープンアクセス論文に CC ライセンスをつけて欲しい。

#### (価格の不透明性)

- 毎年、少しずつ APC の値段が上がっている。
- どういう根拠で価格が決まっているのか不明、出版社によって随分価格が異なる
- 純粋に、高額である。同じ出版社の雑誌によって差が大きい理由も不明。
- 雑誌によって値段が違う。
- 1つの雑誌で、国別の価格差、通常号／特集号の価格差、様々な割引、が提示されるところがあるが、料金体系が複雑すぎて、適切な金額を支払っているのか判断しにくいことがある (HP で一目ですべてのタイプの料金が示されておらず、料金体系を把握しにくい／割引の権利があるのかどうか、HP などの情報ではわからない／など)。
- オープンアクセス以外の掲載オプションがない

#### (研究費の支出手続き)

- APC の支払いが事実上クレジットカードによる立て替え払いであり、一時的にでも個人として支払う必要があること。
- 価格が高いこと。特に論文は科研費の期間終了の頃かその後に出ることが多く、数十万円を校費から捻出するのは辛い。科研費の使用ルールを変えてほしいと思っている。(期間終了後にも 50 万円を限度に予算を残してよく、それを APC や英文校閲に限って使用を認めるとか。)

#### (その他意見・コメント等)

- オープンアクセスジャーナルが全て高額な APC を請求しているとは限らないです。APC の価格を投稿前に確認して同意しかねるなら他のジャーナルにすればいいと思います。ただし、領域によっては選択肢が多くないところもあるかもしれません。IF が高く、広く認知されているジャーナルであれば、オープンアクセスかどうかは特に気にしません。
- 研究者たちは、研究内容を自分たちで作成し、論文を書き、互いに審査し、互いの論文を読んで次の研究につなげるという自足的なサイクルを形成しているのに、それを食

物にするビジネスを研究者たちがお金を出して支えなくてはならないのは「搾取されている」と思いますし、結局は、国民の税金をかすめ取られることになっていると思います。昔の論文は買って読まなければいけないのはしかたないにしても、今生産している知的財産をジャーナルビジネスの商品として握られるのは、人類への知的貢献のあり方として間違っていると思います。

- オープンアクセスの理念は素晴らしいと思うし、賛同したいが、出版社によっては明らかに営利目的としか思えないような高額 of APC を要求していると聞く。その割に査読はボランティアによるピアレビューを基本としており、制度的に矛盾があるように思えてならない。
- 雑誌が持続可能でかつ、著者側にとって安い APC なら大歓迎。今後は、雑誌の格が同程度ならば、APC 費用の安い方に論文が流れていくのではないか。
- オープンアクセスは元来元の経費が出版元にはあまりかからないのではないかと思います。
- ハゲタカジャーナルとの見分けに時間がかかる

### 1.3 APC の補助

(賛成)

- 公的資金はオープンアクセスが強く求められている一方で、若手にとって APC を支払うと研究費を大きく圧迫してしまう。学内での支援制度（例えば指定の雑誌なら何回まで支援等）があると嬉しい。
- オープンアクセスの推奨は支持するが、それであれば APC は各自の資金ではなく、大学が支払うべき。
- 研究費から APC を捻出するのはとてもつらい。別途国や大学のサポート枠というのを設けてほしい。
- オープンアクセス自体は科学の発展には重要なものであると思う。しかし、研究者個人での負担は大きすぎるので、補助金などがあればとても助かる。
- Nature, Science 系等のごく一部の high impact journal に限定して、受理された場合には大学が APC を支払う予算を確保して頂けると嬉しい。安心して high impact journal に投稿できるようになり、結果として大学全体の high impact factor 誌への掲載数が増えるかもしれない。受理されると年度をまたぐことも多いために研究費での支払いが難航することが多いです。
- OA 誌が増えてくるとその分 APC を払う機会が多くなるが、払えなければ学位審査に支障が出るだろう。学生に限らず、支援をしてほしい。
- APC については何らかの形（若手枠、回数限定、大学指定など）で割引があると良いと思います。

(反対)

- 総合大学で合意を取るの難しいのではないか。研究費がその分減るのは絶対に受け入れられないだろう、間接経費から補助するならよいかもしれない。
- 本来は文科省や JST などが基金化して、APC を負担するようにしてもいいと思う。NIH のように。
- 欧米のように助成側が OA 予算を加えて助成するのがよい。
- 文科省が OA 予算要求をしてほしい！！
- 支払い費用が高額な APC への投稿を限られた大学予算で進めるメリットが分かりません。ジャーナル側と 2 重支払いの問題や高額な契約費用に対して対策が必要と考えるなら、日本の全大学で協力して交渉するなどしないと全く意味がないと思います。
- APC の支払い補助よりも、みられる論文を維持、増やすことをお願いしたい。
- 大学からの OA 補助があれば OA にするかもしれないけど、手続きが煩雑になるなら嫌だなという感じ。また、図書館の予算が減っていることは理解しているが、読める雑誌をちゃんと維持してもらうことは大事。輪読会のために学生が選んでくる論文は OA が多い。学生は ILL してまでは読まない (仕組みも知らないし数日待つのは嫌だ)、検索した論文がすぐ読めることが重要。
- 自身は文系の中でも、国際ジャーナルで最新文献を得る必要がある分野であるが、Taylor & Francis や Sage、OUP 等、読めずに困っている。APC に予算をかけるならその分、読めるジャーナルを増やす、最新のジャーナルにアクセスできるほうが良い。文系にも需要があるので、よろしくお願いしたい。
- APC 支払額の補助は必要ないと考えている。それよりも博士課程学生の経済支援が必要だ。諸外国では、複数年度にわたって給費がもらえるフェロシップ制度が充実している。
- 経費の使い方として効率的ではないと思っています。

(その他意見・コメント等)

- 名大で助成があることは知っているが、わかりにくい

#### 1.4 APC の支払経験がない理由

(高額で断念)

- オンラインジャーナルで、掲載料が 4000 ドル程度だったため、投稿を断念したことはあります。
- 文系。APC は払ったことがない。OA にすると、気軽に広く読んでもらえ、ビジビリティアップ、サイテーション増となり、ひいては大学の評価にも利益があるのでできれば OA にしたいが、数千ドル・千数百ドルという法外な価格だったので断念した。数百ドルなら科研費で支払える。

- APC が 3000 ドルで投稿を取りやめた経験がある

(学会費に含まれている)

- 学会誌で学生会員は投稿料無料のものあり。学会への支払いはない。オンラインメインの雑誌。
- 我々は、国際的評価が担保されている学会機関誌（最近では各機関誌も殆どオープンアクセス誌を発刊している）への投稿を原則としており、周知される範囲が広い分、著者・読者の双方にとって良いモデルだと思っている。
- APC 単独で払ったことはないが、学会の参加費に上乗せされていて、実質払うことになることがある。ただし、割合はわからない。
- OA 誌だが、研究者に負担をかけない形での OA を実現している学会誌もある。学会が科研費を取ってきて APC を補助しており（学会員から集めた学会費から出しているのではない）、著者支払いは 5 万円程度。これくらいなら不満はない。
- 論文は何十年も前から掲載料（別刷代）を払っていましたが、オープンアクセスになったのは掲載誌側（学会側）の決定であって、オープンアクセスだから論文を投稿したという意識はありません。
- APC については、学問分野による差異が大きいと思います。私の研究分野であるコンピュータサイエンスでは、主要な国際会議やジャーナルの多くが学会のものであるので、法外な経費をとられることはありません。また、著者バージョンのオンライン公開が認められている場合もあります。

(別の OA 手段：プレプリントサーバ)

- arXiv と自分の HP にプレプリント版を載せている（査読前、査読後などどの版を載せていいかというポリシーは雑誌によって異なるので、認められている版を載せている）。HP に載せた分はアクセス数やどこからアクセスがあったか（国など）を確認できる。載せたプレプリントについて他の研究者からコメントが来ることはあまりない。コメントをくれそうな研究者には前もって自分で送っている。
- 投稿論文ではない雑誌論文を出す場所ができています。査読や費用はなし。論文としての業績にはならない。かつて研究者間で手紙で研究内容を配っていたがそれと同じ役割か。投稿論文は掲載されるまでにすごく時間がかかる（追加実験を求められたりして、それをやっているとまた 1 年くらいかかる）ので、より早く自分がやっていることを公開する目的も。そこに載せた論文を、後でその著者が雑誌論文に投稿することもある。そこに載っている論文を引用はできない（=研究の情報源とはならない）。Yahoo ニュースのソースになっているのは見たことがある。
- bioRxiv は使ったことがある。そのほか、ジャーナルに投稿したらそこと連携しているサーバにアップされたことがある。
- オープンアクセスの手段としては arXiv を利用している。

- 物理・人工知能・コンピュータサイエンスなどは ePrint が発達している。
- 物理・情報分野はプレプリントでオープンにしておき、詳細な査読を経たものしか価値がないわけではない。早く出してナンボで、学会論文等、やり方は色々と余地がある。
- おおよその研究者が arXiv を利用している。HP 利用は少数。
- APC は 3,4 年前に 1,2 回払ったことがある。1,500~2,000 ユーロだった。当時 OA が流行っていたのでどんなものかと思って OA にしたが、自分の分野ではプレプリントサーバ (arXiv) に査読済みのファイルを載せるので中身が同一のものを APC を支払って OA にする意義がないと感じた。
- 無理して APC を支払うことはしない。物理はもともと eprint archive があり、そこにあるものを信用している／自分で価値判断ができるので、最新の情報についてはそこに載っているもので十分ともいえる。
- 素粒子宇宙物理学の分野では、論文を arXiv に掲載してオープンにしているので、費用負担して出版社版をオープンにする必要性を感じない。ただし天文学分野ではプレプリントが必ずしも一般的でないなど、分野によって事情は異なる。
- 物理学は OA 慣れしていると思う。評価などがなければプレプリントサーバーだけでいいのではという気もしている。
- 研究成果である論文をオープンアクセス自体にすること自体はよいことだと思うが、限りある研究費をオープンアクセス化に使うのが必ずしも適切とは思えない。Cornell 大学のプレプリントサーバ arXiv のような自由に使えるシステムの利用を推進したり、システムや環境の整備をしたりするほうが研究者にとって有用ではなからうか。
- 私の分野 (理論物理) では、ほぼ全ての論文が arXiv というオープンアクセスの論文サイトにそもそも投稿されるので、APC を支払ってまでジャーナルに掲載された論文をオープンアクセスにする必要性を感じない。
- オープンアクセスは読者側も研究を報告する研究者側としても、知見を共有するために非常に有効だと思う。ただ、bioRxiv などプレプリントサーバーもあるのでまずはそちらで公開しておいて、ジャーナルのほうはオープンアクセスにしなくてもいい気もする。

(別の OA 手段：機関リポジトリ)

- 機関リポジトリに論文を登録することがある。
- 附属図書館の機関リポジトリに関しては、図書館スタッフからの依頼に応じて論文データを提供している。(出版社版などと比べて) 体裁が崩れてしまうのが残念。
- (公開手段として機関リポジトリを利用する理由) 投稿先で収録してくれるということで、そうした。特に意図してというわけではない。
- 料金を追加して払ってまでオープンアクセスにする必要はなく、レポジトリなどでの公開で十分と考える



(別の OA 手段：研究者 SNS、個人サイト等)

- ResearchGate で研究者コミュニティができあがっているの、希望すればそこでオープンにすることもできる。Public/Private の選択ができるが、Private としていても興味を持った研究者から直接リクエストが来ることがある。それに対して個別に論文を提供してやり取りしている。
- 私の分野では、ジャーナル論文は世界的に書かない習慣となっている。国際学会が主たる発表の場であるが、著者の HP に論文を掲載して良いことになっているので、大学でオープンアクセスに対応する必要性が全くない。
- 著作権の問題をきちんと理解していないが、研究者が自己アピールの為にオープン化したいのであれば、自身の HP 内に掲載する等の手法があるのではないかと？学会の維持の為に費用は本来は情報入手したい人が費用負担すべき。

(投稿先が OA 非対応)

- 数学は OA にあまり対応していない。OA にするほうが少数。大手はともかく OA 対応じゃない雑誌も少なくない。
- 生物工学分野としては OA にするのが主流というわけではない。
- 日本の看護業界では、英文誌が少なく、和文誌も依然地位を保っている。そのためか OA 誌も主流ではない。査読済論文のステータスが高い。
- 文系は学会誌が多い。学会誌は会費を払ってれば雑誌が送られてくる。また国内論文で仕事ができる人が多い。(専門から外れるが法学では)論文は依頼ベースで原稿料がもらえる世界。APC が必要な商業ジャーナルや国際ジャーナルに投稿する人は格段に少なく、インセンティブも低い、若手の先生はインセンティブが高い。
- オープンアクセスを選択できない雑誌への投稿を妨げる考え方はやめてほしい(現状そのような方向に進むことを懸念している)

(OA にしたくない)

- 国際的な適正価格が不明であり、オープンアクセスに同意することは極めて高額な支払いが必要となると思うから。国際的な評価を受ける雑誌に関してはなかなかアクセプトされないが、レベルを下げてまで公開することはないと考えている。学生が投稿先を探して集めてくる投稿雑誌においては、こうした現状がしっかりと認識されていないので、研究指導の際に特に注意している。

OA・学術出版全般への意見・コメント

- OA ジャーナルの評価は読み手が行うしかない。コンセンサスの問題。
- 雑誌の購読料の高騰に対抗した動きなのだろうと見ている。
- IF は最近全般的に上がっているが、OA 誌で特に伸びている印象。
- OA 誌の長所としては、投稿先の選択肢が広がること、査読が早いこと、掲載されやす

いことがある。いっぽう、良い悪いの見分けが付きにくく、実態が分からないといった不安要素もある。

- OAであれば図書館にない論文・購読していない論文もすぐ入手できるので恩恵は感じる。
- 出版版（最新版）がOAになることが望ましい。（引用の観点から）また出版版をOAにすると自身が著作権を持てるのでいい。
- 名古屋大で格の高いオープンアクセス紀要を作っても良いのではないか
- オープンアクセス制度に関しては、回答者個人としてこの先も利用することは考えていない。
- 出版論文をオープンアクセスにしない代わりに arXiv などに掲載することでオープンアクセスとしたと認めてほしい。これに関連するが、オープンアクセスにした論文、arXiv に掲載した論文をさらに機関リポジトリに掲載することは手間の無駄であると考える。
- プレプリントサーバーや機関リポジトリへの論文掲載はこれまでしてこなかった。学術誌に掲載することで世間に公開されるという認識でいたが、他の方法でもオープンにすることにより、学術誌にアクセスできない多くの人に見てもらえることができるという気づきがあった。
- 最近では、OAである雑誌のほうが、多くに人がアクセスできるということで、それ自身は良いことである。最近では、OAの方がIFが上がる傾向がある。アクセスする側のメリットが大きいので、良いと思うが、良質な雑誌が生きていけなくなる。
- 適正な金額でのオープンアクセスは、大手出版社のパッケージ価格高騰を抑制する意味で必要と思う。
- （OAが主流じゃない）一方で、海外の研究者と特集号を出そうという話をしたときに、アジア系の研究者は「OAにするのが普通だね」というスタンスだった。
- 弱小な学会（日本国内の学会はほぼこれに当てはまる）ほど、オープンアクセス化に舵を切らざるをえない事情がある。著名な学会論文誌であれば、読者は喜んで購読料を負担するが、弱小学会の論文誌は、わざわざお金を払ってまで読もうとは思わない。したがって、弱小学会の論文は、オープンアクセスにしない限り、人目にふれるチャンスがなくなる。
- 国内の複数のジャーナルの編集委員をやっていて、その中でオープンアクセスについて議論もしている。現在IFが付いていない小規模雑誌では、より多くの論文投稿を集めるためにOA化を検討しており、OAにポジティブな印象がある。
- 中国は大手出版社の雑誌への投稿ではなく、国内雑誌への投稿中心にするように求められているらしい。
- 中国の論文がとても増えた。1号に掲載される論文数も増加しており、1年に出る号が増えた雑誌もある。

- 最近発刊された雑誌は良くないものが多い、昔からある雑誌は比較的良い、という印象。
- 足元を見られている。書いて読んで評価しているのは研究者自身だが、税金を無駄遣いしている・すりへらしている感じがする。
- ブランド雑誌がファンドマネージャーによって買収されている。出版社の数が少なくなってきたり寡占状態。

## 2 ハゲタカジャーナルについて

### 2.1 ハゲタカジャーナル被害について

#### (トラブル等事例)

- (ハゲタカジャーナルかはさだかではないが) 査読を引き受けた論文についてリジェクトしたはずの論文が別の雑誌でアクセプトされ掲載されていたことがあった。
- 査読が返ってこず半年ほど待ったが結局別雑誌に投稿したことがある。
- 自分の知らないうちに、共著者が共著論文をハゲタカジャーナルに載せてしまったことがある。共著者は作業を学生に任せていて、学生が知らずに選択してしまったらしい。出版されてからそのことを知り、取り消したいと思ったができなかった。こういったことは研究者生命にかかわるリスクだと思うので、早く対応策を考えるべきである。
- ハゲタカジャーナルと気づかず投稿してしまった。
- 博士課程の学生が国際会議 ACCAS に原稿を投稿する際に、類似略称(ACAS, The Asian Conference on Asian Studies) の詐欺国際会議のようなものに投稿しかけて著者情報を投稿システムに入力してしまった。その後、頻繁にハゲタカジャーナルから投稿勧誘メールが来るようになった。
- 雑誌の掲載プロセス等には問題なかったが、その後にハゲタカジャーナルというレッテルを張られてしまった。
- 研究科の博士課程審査において、ある学生の査読済み論文 1 本が predatory journal であり、審査に混乱が生じた。学生独自に投稿したようであった
- 共同研究者が投稿先に選ぶうとしていて止めるよう説得したことがある

#### (迷惑メール)

- 迷惑メールは毎日たくさん届くが、自分自身は騙されるようなことはない。
- 捨てるのも大変なくらいメールが多い。必要なメールも紛れてしまうので自動で捨てるができない。
- 投稿を求めるメールのほか、レビューを求めるものも多い。いったん引き受けてしまうとレビューアーリストにのるので警戒している。
- 勧誘のメールは来るが聞いたことない雑誌については調べればわかるので返事しない。
- 迷惑メールはたくさん届いているが、明らかに見た目が怪しいので引っかかることはなかった。

- 名大メールサーバーで NU-SPAM に振り分けられるものもあるが、すり抜けるものも多いため、対策していただけるとありがたい。
- 多くの predatory journals から投稿を求める e-mail が毎日大量に届き e-mail の削除だけで毎日時間を無駄にしています。加えて投稿誌からの重要なメールや査読を求めるメールの誤消去も頻回に起きています。predatory journals からの販売促進メールを禁止して欲しいと思います。
- 実際にトラブルに巻き込まれたことはありませんが、勧誘メールが多すぎることで、そしてそのせいで重要なメールが目立たなくなってしまうことに困っています。ハゲタカ出版社からのメールを大学のサーバーでブロックしてくれるようなシステムがあれば良いですが、なかなかそれは難しいことだと思います。
- 怪しい雑誌からのメールが毎日のように届いていて困っています。
- 大学メールには様々な雑誌（専門外の雑誌からも）から投稿依頼が連日 10 件以上届く。かなり不愉快な思いをしている。
- 迷惑メールがたくさん来て困っています
- 投稿勧誘メールが頻繁にくる。
- トラブルにはなっていませんが、論文をオープンアクセス化して公表したところ、それ以前よりも頻繁に様々な雑誌から投稿依頼のメールが届くようになりました。
- 頻繁に勧誘メールが届く、のであれば毎日多数
- 「頻繁に勧誘メールが届く」程度のトラブルなら頻繁
- ハゲタカではないかもしれないですが、MDPI というスイス？の出版社から、いろいろな勧誘メールが送られてきます。
- 頻繁に勧誘メールが届く。論文を corresponding author として出した後から勧誘メールが増えだしたので、corresponding author のメールアドレスを収集しているように思う。
- 新しい雑誌の編集委員に依頼されるメールがここ 3・4 年増えており、よく知る知人名を語って連絡してくることが多い。雑誌ホームを検索して確認すると、いわゆるハゲタカ雑誌として新しい雑誌を発刊しようとしていることがうかがわれる内容であった。著名論文雑誌の増産が見えない形で奨励されており、大学としての明確なアナウンスを教育研究指導の先生方に周知することは無論、研究に携わる学生個人にも大学として明確に伝える必要があると思う。
- 勧誘メールは迷惑メールにいくように設定しているので個人的には問題ない。
- 頻繁に勧誘メールが来ているが無視しているので幸いトラブルというレベルにはない。

(見分けが難しい)

- ハゲタカジャーナルの明確な線引きが難しい。
- ハゲタカジャーナル (predatory journal)かどうかの判断が難しいときがあり、投稿に悩むことがある。

- IF は高いがハゲタカっぽい、見分けのつかないものもある。MDPI はハゲタカであるのか、ないのか？知人が投稿して業績リストに上がっていたりするのを見ると、止めたほうが良いのか黙認して良いのか迷う。
- 出版社が完全オープンアクセスジャーナルであることを謳う雑誌を従来の雑誌とは別に立ち上げる結果、論文誌が乱立している状況にある。このような論文誌についてハゲタカジャーナルかどうかを判別するのは難しい。
- ハゲタカジャーナルの定義が明確でなく、人によってはハゲタカジャーナルというジャーナルが存在している。仕組みはどうであれ、オープンアクセスジャーナルが増えることは研究者にとっては好ましい。
- オープンアクセスが今では高インパクトファクターになったり、査読時間が守られていて、サービスがよくなる一方で、どこがハゲタカなのか、よく解らなくなっている。ひとまず、MDPI や、古くからあるエルゼビアや Cell press や ACS など大丈夫だと認識している。

#### (自衛策)

- 論文投稿時、論文引用時にはホワイトリストを確認して、ハゲタカジャーナルには関与しないよう細心の注意を払っています。
- 学術団体が発行するオープンアクセスジャーナルが要求する APC を 1 つの目安とし、これより著しく高い APC を要求するオープンアクセスジャーナルには投稿しないようにしている。
- JCR、MathSciNet 等に掲載があれば信用できると考えている
- 雑誌のヒエラルキーがはっきりしているため、ハゲタカジャーナルに引っかかるようなことは少ないのでは。院生は心配ではあるが、教員がアドバイスをしている。
- 若手研究者などで論文の本数を伸ばしたい場合、有名でない雑誌へも投稿することがある。その際にハゲタカジャーナルの見極めが困難である。現状はインパクトファクターの付いている雑誌を選択するようにしている。
- ハゲタカジャーナルの見分け方はこれというのはないが、メールの宛名(自分の名前)が間違っている等の不審な点がある、知っている雑誌か、で見分けている。
- 院生の対応としては投稿する論文を見る段階で投稿先も確認している。
- 院生の投稿先は必ず見る。どういうジャーナルがいいかという候補も教員側からいくつが出す。
- 学生の論文は指導教員が共著となるので、勝手によくわからない雑誌に投稿することはあり得ない。
- 雑誌のバックボーンがわかっているので、現状では回避できている。ただし、新しい分野の雑誌に投稿するときは心配。当該分野の人に聞いてみるほかない。
- 自分が投稿するのは従来からの大手出版社や MDPI の、IF や QUARTILE 等評価のしっかりしている雑誌のみで、他のジャーナルはハゲタカかどうかの見分けがつかない

ので怖くて出してない。ハゲタカジャーナルは駆逐されることを期待する。

- ハゲタカ対策としては、大手の出版社から出ている雑誌に出す、DB（先生の分野だとPubMed、WoS）に収録されている雑誌かどうかをチェックする（IFがついていればさらに安心）など。
- ホワイトリスト（DOAJ）やWoSのJCRを確認して防いでいる。論文の投稿先は、普段読んでいるジャーナルを狙うのが基本線だが、厳しそうだったら、IFの低いジャーナルに変えている。
- 出版社、編集委員からおおよそ雑誌の信頼度は判断できる。
- 分野として投稿先が限られていることもあり、ハゲタカジャーナルの問題は特にない。

(MDPI)

- 勧誘が手あたり次第でひどい。なぜ自分に？と思う分野が異なるテーマの特別号エディターや査読の依頼が来る。開始時点がハゲタカ。
- MDPIの論文誌はハゲタカジャーナルとしてリストアップされている。こちらについては附属図書館での閲覧は控えて欲しい。
- 出版社MDPIの発行する論文誌に投稿された原稿の査読をいくらか行ったことがある。極めて低品質な原稿が多く、明らかに出版できる水準に達していない旨のレポートを提出したが、レポートを無視して出版されることが度々あった。（あまりに対応がひどかったため、現在はMDPIからの査読や投稿依頼はすべて無視している。）少なくともMDPIの論文誌の一部については査読ありというのはまったく形式のみで、APCで儲けるためのハゲタカ系論文誌とみなすべきである。名古屋大学ではMDPIのAPCを割引するサービスがあるようだが、MDPIとの取引は停止すべきであると考えている。
- トラブルには至ってないが、MDPIの雑誌の特集号への投稿を知人より依頼された。当初は当該雑誌に「ハゲタカの疑い」があることを認識していなかったが、実際原稿を準備する前に改めて情報収集した結果「ハゲタカの疑い」が払拭できなかったため、投稿を辞退した。
- MDPIはしっかりした雑誌とそうでないものが混入していて評価が分かれる。
- 良い論文が載っていることもある。が、editorへの勧誘はハゲタカ（手あたり次第）
- MDPIは、はじめBeall's listに掲載されていたが除外されたと聞く。以前参加した国際会議のSpecial IssueがMDPIから出されることになり、初めてMDPIから出した。その後、潜り込むつもりでボード（編集委員）に入った。査読が通りやすい印象は確かにあるが、落とすこともある。最近発刊されたジャーナルは怪しいし、全体としては良くないが、自分が関与したジャーナルはIFも評価も高いので問題ないと思っている。hindex100で論文を500も書いている高名な研究者も投稿している。スタッフとのやりとりでも問題はなかった。本社はスイスと書いてあるが実態は中国である。査読や編集委員に特典を与えて高名な研究者をうまく取り込んで独自のビジネスモデルを作っている。囲い込み。

- MDPI には投稿したことがある。エディターもレスポンスはあったし、査読もちゃんとしていた。一方で評価が分かれていることは知っている。
- MDPI という出版社はハゲタカとして有名であるが、レビュー論文を集めることでまともな研究者が多数執筆するという不思議な現象が宇宙物理の業界では発生している。これは MDPI を知らない著名研究者にレビュー論文の特集号のエディターを MDPI が手当たり次第に依頼し、それに応じた MDPI の悪質性を知らない研究者が、同業者に執筆依頼をするという形で広まっている。掲載される論文自体はまともであり、また引き受けたエディターもちゃんと仕事をするので、結果としてその特集号の質は悪くない。しかし MDPI は手当たり次第にスパムのように特集号の作成を世界中の研究者に持ちかけている状態のため、宇宙物理以外の分野でも注意が必要である。このような事例を大学や国内全体で収集し、対策を講じる必要がある。
- MDPI については、APC 割引の通知が大学からあったので、大学が認めているという認識があり、安心して出した。
- MDPI は、査読を全然しない、めちゃくちゃな論文が掲載されるようなハゲタカではないのだと思う。新しい出版社が生き残るための方策として悪いことではないのかもしれない。
- MDPI には博士課程学生が投稿したことがある。学生が修了までに論文を出したいという意向があり、査読が早いところを探していた。心配だったが、学生にはよく注意して調べるように伝え、学内の他の研究者も投稿していてそれなりの評価があること、知人がその特集号のエディターをやっていて安心できたことで信頼した。申し込みからアクセプトまで 3 週間程と早かった。アクセプトから掲載までも 1 週間前後とすごく早い。早いのに査読もしっかりした内容で行われており、学位の審査にも間に合った。通常の論文投稿では、査読者への依頼だけで 1 カ月以上かかることもあるので、このスピード感はメリットである。
- MDPI をハゲタカジャーナルと言う者もいるようだが、投稿した論文には 4 名の査読者から厳しいコメントがくるなどしっかりした雑誌との印象をうけました。おかげで修正してとても良い論文になったと感謝しております。APC も国内の学会誌の投稿料と較べて同等で、APC 目当てのハゲタカとは違うと思います。
- MDPI には直接指導した優秀な学生が投稿し、丁寧に査読してもらった。

(その他意見・コメント等)

- 何をもって「ハゲタカ」とするかであるが、高額な支払いを請求されたことはない。査読の厳しさの程度は、ジャーナルのレベルにもより、国内の学会誌は易しいということもある。
- いわゆるハゲタカジャーナルでも高いインパクトファクターがついているものもあり、学位審査等注意が必要だと感じています。
- ハゲタカジャーナルは査読システムが酷いため投稿は避けます。また最近、オープンア

クセスの中国由来の雑誌（時に出版社はヨーロッパの別の国）で、impact factor と論文内容の実態が酷くかけ離れているものがあり注意が必要かと思います。

- 研究者を騙して不当に高額な APC を取ることは、研究者の貴重な時間と研究費を奪い取ることに他ならない。また適切な査読が行われないことは、世界の研究の水準を下げることに直接繋がる。いわゆるハゲタカジャーナルが適切な評価を受けて、無くなっていくことを強く願う。

## 2.2 対策について

（リスト・指針が欲しい）

- どの雑誌がハゲタカジャーナルなのか？リストが欲しい。
- ジャーナルの質の確認が必要で、学校からガイドラインで、質が担保できるジャーナルのリストがあったらいいと思います。
- ハゲタカジャーナルかどうか、見極めが難しい。ホームページ等でハゲタカかどうか、データベースを示したらよいと思う。
- ハゲタカジャーナルがあるような状況で、科研などファンド元がオープンジャーナルを強いるのは、良くないと思う。少なくとも、ハゲタカジャーナルのリストを公開して、そこには出さないようになどのサポートが欲しい。教員がそれを調べる工数が無駄。
- 論文投稿の際には web of science に収録されている雑誌か否か確認してから投稿するようにはしているが、ハゲタカジャーナルの一覧は随時公開してほしい
- いわゆるハゲタカジャーナルまたは、APC の高額な雑誌名を学内で公表していただき、対策できるようにして頂きたい。
- ハゲタカジャーナルをすべて特定してリスト化し、これらのジャーナルには投稿しないようにと、公式に通知してほしい。
- ハゲタカジャーナルのリストがあればほしい（Beall's List は知っている）。自分の分野であれば経験的に判断できるが、周囲の関係者への助言ができない。
- ハゲタカジャーナルか否か判断が難しいケースもある。インパクトファクタがついていけば問題ないと判断してよいか。大学としてハゲタカジャーナルか否かどのように判断するか教えていただきたいが、難しいと認識している。
- ハゲタカジャーナルへの APC 支払いに関するトラブルがある…、とのことだが、であればハゲタカジャーナルとはどのジャーナルなのかを大学側である程度規定し、ハゲタカジャーナルへの APC は大学からは支払わない、と決めてはどうか？ journal impact factor (JIF) が定まっていないジャーナルはハゲタカジャーナルの可能性があるので、JIF が定まっていないジャーナルへの APC については、大学側から支払わない可能性がある、などと通知を出してはどうか？まともな研究者であればハゲタカジャーナルへの APC 支払いによるトラブルは生じないと思う。



- ハゲタカジャーナルを業績リストに含めてしまった場合、どのくらいネガティブなインパクトがあるのか。大学としての指針をはっきり示すべきだと思う。
- ハゲタカジャーナルについて教員が十分に理解しているか懸念を覚えることがある（分野柄、全く知識のない教員もいる）。投稿先の選定のみならず、業績評価等の際にも対応が必要であり、特に後者については少なくとも「このジャーナルに載った論稿は評価してはならない」というリストの共有など、組織的な対応がある程度必要ではないか。
- ハゲタカジャーナルのリストを知りたい。例えば MDPI の査読は悪く、ブラックリストされたことがあるが最近状況はクリアされたそうです。しかし、MDPI に投稿はいかどうかが不安です。名大や日本の大学機関でハゲタカジャーナルのリストが管理されているか、どのジャーナルは NG など知りたい。
- 教員は適切な査読を行わないいわゆるハゲタカジャーナルに投稿すべきではないと思います。大学は、ハゲタカジャーナルへの投稿を阻止すべきで、ハゲタカジャーナルに掲載されている論文を研究業績として認めてはいけないと思います。
- その分野の定評ある雑誌かどうかの判断はできるが、定評ある雑誌以外の見分けが付きにくいので、信頼できる情報（安全なホワイトリスト等）があるとうれしい。
- ホワイトリストがあるとしたらそれも活用できるが、完全ではないだろう。ブラックリストとホワイトリスト両方参照することが必要か。
- ハゲタカジャーナルかどうか、見る人によって意見が割れることがある。学内の研究者間では良いとされていても、他大学では評価が低い場合もあり、安易に OA 誌に投稿するのは良くないと考えている。ハゲタカジャーナルを特定し、投稿してはいけない雑誌のリストを出すなど、大学としての指針を示してほしい。

(教育・サポートが欲しい)

- 大学としてしっかりと教育をする行う必要があると思う。
- 研究による知見を世界で広く共有していくためには、オープンアクセスは必要だと思います。ただ、ハゲタカジャーナルは近年非常に巧妙で、見分けるのに注意が必要なため、学生（特に院生）に向けてハゲタカジャーナルに関する講義を実施したらよいと考えます。
- ハゲタカジャーナルに関する相談窓口があると被害にあった人の対応に役立つのではと感じる。
- ハゲタカジャーナルの線引きが難しい雑誌もあり、Web of Science でインパクトファクターが表示されることなど、判断の参考にすべき条件の啓蒙がまだまだ必要と思われる。
- 見極め方や注意点を教えてほしい。
- (平成 30 年 2 月に研究担当理事から注意喚起を行ったという説明に対して) 大分経っているので注意喚起した方が良い。ただし、名指しするのは Beall 氏でさえ訴えられた

のでできないだろう。主に大学院生や海外からの留学生をターゲットに、指導教員にもあわせて注意喚起できるとよい。

- だいたいの人が危険性はわかっていると思うが、大学からのアナウンスが定期的であれば注意はするかも。

### 3 研究活動・研究評価について

(研究評価：投稿論文の重要性)

- 無名の海外ジャーナルから査読の依頼がよく来るがなるべく断っている。査読を引き受けたこともあるが、議論に値しないレベルの原稿ばかりで、全くの時間の無駄だった。そこから類推するに、低レベルな論文を、いい加減な審査でどんどん掲載しているような論文誌（ハゲタカ、あるいはハゲタカに近いジャーナル）だと思われる。査読の労務においては無料で研究者をこき使う一方、著者から法外な出版手数料を取るような、不健全なビジネスモデルが成立してしまっていると感じる。そのビジネスモデルを成り立たせている背景には、論文の数を重視しすぎる業績評価が関わっている。すなわち、研究者は、法外な出版手数料を支払うとしても、多数の論文を発表しなければいけない、という圧力を感じている。
- ハゲタカジャーナルの問題は、著者を騙して APC とることだけではなく、名の通ったジャーナルだと嘯いて論文数を稼ぐために利用する研究者がいることである。
- Predatory journal が研究者をだましている場合もあると思いますが、高額な掲載料を支払えば実質的に査読なしでレベルの低い論文を査読論文として公刊できるので、predatory journal と知っていて投稿する研究者もいるのではないのでしょうか。質の低い査読誌の掲載論文を適切に業績評価することが必要だと思います。
- 評価においては論文数よりもどこのジャーナルに載っているかが重要。知られていないジャーナルでは業績として見られない。
- 学術誌に投稿する理由は、①査読を経ることで論文の質が上がるから、②研究評価の面では学術誌掲載論文の方が重視されているから。
- 評価の観点で言えば、国へのアプローチには論文で評価されたことが求められる。
- プレプリントのアクセス数ではなく論文がどの程度引用されたかが最終的に重要なので、プレプリントがあればいいというわけではない。

(研究評価：評価基準の再検討)

- (期間がある留学生や学位取得期限がある大学院生には購読型の査読は長いため、OA誌に出すという話もあることに対して) そもそも学位審査に投稿論文を必要とするのかという議論がある。他大学では、学位審査の方が投稿の査読よりも厳しいので投稿論文は必要としていないところもある。
- 論文の評価指標として、従来の引用数だけでなく、SNS によるいいねの数などが利用

される動きもある。

- ブランドジャーナルへの投稿が評価のすべてになっている仕組みを変える必要がある。アウトリーチとしては、テレビ出演や名大研究フロントライン (YouTube チャンネル) で紹介してもらったり、名古屋大学 COI のチャンネルもある。こうした活動や、オンライン教材の作成も良いコンテンツは評価されていると思う。
- Nature などの一流雑誌の OA 版として姉妹紙が存在するが、査読はかなり適当である。それを姉妹紙と見なして一流雑誌と同様に高く評価することも問題であるとする。
- 先日投稿した学術誌は商業誌だが、通常は無料の掲載料にもかかわらずオープンアクセスに対して 40 万円ほどの料金が提示された (異常に高額だと思う)。オープンアクセスにすればサイテーションが上がり、論文の評価が高まることが期待されるが、これは業績を金で買うような行為であり、大学としてこういった APC 利用による業績稼ぎをどのように考えるか、慎重な議論が必要である。
- 詐欺的なハゲタカジャーナルは確かに問題だが、論文、国際会議等がそのような団体の勢いにおされて、過去ハゲタカジャーナルとして認識されていたが、少しずつ地位を向上させているジャーナルなどがあることは事実である。それに伴い、従来権威があったジャーナルの注目度やレベルも急速に下がっているようにも見える。査読フリーでの論文公開も今後ますます増えてくるであろう時代の流れの中で、過去の考え方に捕らわれすぎるのも良くないかもしれない。
- 機関リポジトリに論文を登録することがあるが、その際、統計もちゃんと取れるようにして、さらにそれが自分の評価につながるようになるといい。システム移行で統計が取れなくなっているようだが、早い改善を期待する。

#### 4 その他

(ジャーナル購読費の問題への対応)

- 全学的なジャーナル購読料なども含めた分析結果を公開してほしい (APC が増えた分、購読料が減ったかどうかなど)。
- 雑誌購読費について、マイナー科は share できないので単独科で購入せざるを得ないので厳しいと思います。
- 名古屋大学では、図書費・電子ジャーナル費の分担方法が学部ごとにまちまちです。一般会計は研究科単位であるのに、図書費は学部単位になっているのも、面倒です。電子ジャーナルパッケージの負担額について、昔の冊子体を購読していたときの負担額をもとに各学部の負担額を算出しているのも不合理です。学部全体でジャーナル費用を共通経費化している学部と、個々の教員にジャーナル銘柄ごとの負担を求めている学部があったりして、数個の学部 対 一講座あるいは一教員で、負担額の調整・交渉をしなければならぬことがあります。教員が辞めた後も、後任ポストにあたる教員にジャーナル支払い負担の引き継ぎをお願いしていることもあります。こういった不合理な

やり方が、本学の研究力の足を引っ張っていることは間違いない（自分の研究に直接つながらないジャーナルを買い支えなくてはならない、自分が直接にアクセスしたいと思うジャーナルの購読の妨げになる、研究費がその分減る、こういったことを検討したり交渉したりすることに時間・労力を費やすなど）と思います。そして、私は、これまでも何度も機会あるごとにこう言った発言を部局の内外でしてきました。それに対して効果的な応答が得られたことは、残念ながらありません。こういった状況を打破・改革したいと本部がお考えになるなら、私もアイデアを出すことには協力したいと思います。ただ、図書情報・データベースなどの技術的なことには協力できなくてすみません。

- 電子ジャーナルの高騰を考えると、オープンアクセスは是非とも協力を推進すべきだが、論文サイクル、すなわち研究の発案から外部資金の獲得、研究の実施、成果の発表といったサイクルに平均 5 年を超える時間のかかる私のような研究分野では、これに必要な高額なオープンアクセス費を外部資金で賄うのは、極めて難しい。オープンアクセス化を推進すれば、電子ジャーナルの維持に必要な金額は（原理的には）抑えられるはずなので、全学レベルで電子ジャーナル経費を取って削減して、オープンアクセス化の援助に資金を回すべき。
- 2024 年に Nature や Science などのトップジャーナルがオープンアクセスになるとの噂を聞きました。150~200 万円との試算が出ているそうです。これらだけに限りませんが、図書館で雑誌購読費用を減らしていくことができるはずだと思うので、浮いた分を APC の支払いの補助金として配ってもらえると嬉しいです。
- EJ の会計が入り組んでいる。特に情報は学部のバックグラウンドが多様（環境学、情報学、工学、文学...）で、個別教員が調整しないといけないので大変。
- 紙媒体ベースで分担額を決めているが、さすがに限界なのは。EJ は誰でもアクセスできるのに。分担をやめるとき「もうアクセスするな」といわれることもあるとか。過去のいきさつがわかっている教員ならある程度諦めはつくが、新しい先生にそういう負担を継続してもらうのは理解してもらいづらい。
- 文系の先生は研究費がほぼ雑誌購読費で消えるのでつらい。部局内で予算サポートはしているがその処理も煩雑。
- 調整にかかる労力を考えると、部局予算に下ろす前の天引きにするのがいいのでは。部局に来るお金が減っているように見えるだろうが、結局は同じこと。
- 昨年、図書館委員会で、Nature の契約維持対象タイトルを決めた際、アクセス数を指標に用いたが、昨今求められているサステナビリティや SDGs の実現に資するという観点を指標に用いてもよいのではないか。
- IEEE を大学で契約してほしい。各教員が一人数万円支払っているので合計すればトントンではないか。学会には基本料金プラス各 Society への追加料金を払っている、他 Society 掲載論文は読めない。

(Read and Publish 契約について)

- read and publish 契約を積極的に検討してほしい
- 大学によって discount が適用される論文があります。membership への登録が必要でしょうが、拡大してもらえれば幸いです。
- RAP モデル (APC とセットになった雑誌購読モデル) があれば、OA にすることはいとわらない。安くなるのは助かる。
- APC と購読料をセットにする契約であれば、購読料は大幅に値下げして欲しいと思います。
- 信頼のおけるオープンアクセスジャーナルならば、大学中央図書館が契約することにより APC の割引制度があるので利用すると良い。
- APC は個別に支援 (助成) するのがよい。APC は理系中心の話であり、APC 込みの購読契約を図書館で行うと、理系と文系の格差をさらに広げることになるだろう。

(国レベルでの議論を期待)

- オープンアクセスおよび APC のみならず、雑誌購入 = 科学技術情報の入手に対する戦略の策定は、大学ごとではなく文部科学省または国主導で進めていただきたい。
- 雑誌の年間契約料が異常に高くなっていることは承知しているが、大学が高価な購読料を払っている雑誌については、掲載料の免除や減免を出版社に訴えることを継続していただきたいです。
- かなりの購読費を大学が払っていてその上さらに出版社に APC を払うのは、支出が増えることであり、出版社の二重取りであり、大学外の人にどれだけ読まれるのかという費用対効果を考えると OA 推進は疑問である。日本全体で検討し、エルゼビアとケンカするくらいしてほしい。
- APC については、日本のために、ぜひ大学のネットワークを活かして、研究機関ごとではない Read and Publish の実現などに向けて頑張ってください。
- 海外の主な研究所、大学は重要な出版社と包括的契約を結んで個別に研究者が APC を支払わなくてもよいようになっている。すべてにおいてそうだが日本は研究者への支援において非常に遅れた感がある。また最近のこれらに対する新たに打ち出されている施策は現場の状況と完全にずれている。このまま日本の研究力が落ちているという言説だけに振り回されて無駄に税金が使われていると感じる。

(研究者支援を要望)

- 図書館は研究成果の発信のお手伝いをする方針だと思っている。OA の方法や Good Practice 等、情報面での支援をしてもよいのではないか。
- 学会で今度、学会誌の編集のノウハウのセミナーを行うのだが、海外の大学にいた頃、図書館でそういったセミナーを頻繁に行っていた。外部講師はお金がかかるというのであれば学内の先生にお願いすればよいと思う。ジャーナル投稿に関するトピックや

ソフトの使い方、研究者の出会いの場としての役割等、図書館は知のプラットフォームとして研究者支援のセミナーも主催してほしい。

(その他意見・コメント等)

- 困っていること・大学の支援について、指導教官との関係がうまくいかない例があるため手助けが欲しい。
- インターネット検索した際は arXiv よりジャーナルが上位に来る。出版社は営利企業なので arXiv へのリンクを付けてくれないだろうが、その方向のリンクがあると大変良い。

## 〈参考〉アンケート項目

本アンケートは、本学研究者の APC 支払の実態を調査し研究環境の改善に努めるとともに、学術情報流通における課題解決に役立てることを目的として実施するものです。回答所要時間は 5 分程度です。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

### \*回答必須項目

#### 回答者について

\*1. ご自身の研究分野を教えてください

- 人文系
- 社会科学系
- 自然科学系
- 工学系
- 医学系
- その他（自由記述）

\*2. ご自身の身分を教えてください

- 教授・准教授（特任を含む）
- 講師・助教（特任を含む）
- 研究員・ポスドク
- 大学院生
- その他（自由記述）

#### APC に関する質問

\*1. これまでに APC を支払ったことがありますか。

※APC (Article Processing Charge) …著者が出版社サイト等で論文をオープンアクセスにするために出版社へ支払う手数料

※オープンアクセス…学術成果を、オンラインで、誰もが無料でアクセスできるようにするプロセス。

- ある
- ない

#### パターン A：APC を支払ったことが「ある」人への質問

\*2. APC を支払ってオープンアクセスにした論文について、そうした理由を教えてください。(複数回答可)

- 研究の進展・活性化のため、研究成果はオープンにすべきと考えているから
- 研究助成金のルールで公開が義務化されているから
- 研究評価に関わるから
- 研究を広く知ってもらえることができるから
- 共著者あるいは指導教員から勧められたから
- その他 (自由記述)

\*3. 支払っている APC の価格やそのサービス内容に不満はありますか。

- ある (具体的に)
- ない (具体的に)

\*4. 本学では 2019 年度から APC の実態を把握するための調査を行っており、APC 支払時、財務会計システムの品名に「APC:(雑誌名)」と入力していただくことをお願いしています。このことをご存知でしたか。

(参考 URL) <https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/oap/apcpay.html>

- 知っている協力している
- 知っていたが対応できていない
- 知らなかった

#### パターン B : APC を支払ったことが「ない」人への質問

\*2. APC を支払ったことがない理由を教えてください。(複数選択可)

※プレプリントサーバー…学術成果を収集し無償公開する分野リポジトリのうち、プレプリントに特化したもの。arXiv や Social Science Research Network (SSRN) などがある。

※機関リポジトリ…大学や研究機関等が、自機関の構成員による学術成果・教材などを収集し、インターネットにより無償公開していく仕組み。本学には「名古屋大学学術機関リポジトリ」<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/>がある。

- APC の価格が高額で支払が困難
- APC の支払が困難とまではいえないが研究費節約
- 別の手段でオープンアクセスにしている (差し支えなければ、その手段：
  - 機関リポジトリ
  - プレプリントサーバー
  - 個人 Web サイト
  - その他 (自由記述)



- 投稿先がオープンアクセス非対応
- そもそもオープンアクセスにたくない（差し支えなければ、その理由）
- その他（自由記述）

\*3. 本学では2019年度からAPCの実態を把握するための調査を行っており、APC支払時、財務会計システムの品名に「APC:(雑誌名)」と入力していただくことをお願いしています。このことをご存知でしたか。

（参考 URL）<https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/oap/apcpay.html>

- 知っている
- 知らなかった

#### AB 共通

\*1. オープンアクセスジャーナルへの投稿や APC の支払いをめぐって、ハゲタカジャーナル※等のトラブルに巻き込まれたことがありますか。

※ハゲタカジャーナル(predatory journal)…著者を騙してAPCを取ることを目的とした悪質な学術誌。  
適切な査読が行われていない、研究者に無断で編集委員として記載された、無料だと思っていたら不当に高額な料金を請求された、頻繁に勧誘メールが届く等のトラブルが世界各国で報告されている。

- ある（トラブルの内容、ジャーナル名、出版社名・学会名）
- ない

2. オープンアクセスと APC についてご意見がありましたらお聞かせください。(自由記述)

3. より詳しくお話を伺うための追加インタビューにご協力いただける方は、お名前とメールアドレスをご記入ください。後日附属図書館担当者から連絡させていただきます。(任意)

ご協力ありがとうございました。